

自己学習型によるオンライン授業の実践報告

—「現代社会と教育人間学 A」を事例として

鈴木俊之

はじめに

本稿は2020年度前期講義「現代社会と教育人間学 A」を事例に、オンライン授業における自己学習型講義の実践とその課題について報告するものである。最初に、自己学習型を採用にいたる過程について扱い、その後実際の講義の進め方について報告する。最後に自己学習型を含めたオンライン授業の課題について考察する。

1. 自己学習型を選択するにいたった経緯と理由

青山学院大学が提示するオンライン授業の形態は3種類、すなわちリアルタイム型、オンデマンド型、そして自己学習型である。他大学の実施状況を見ても名称が若干異なるだけで基本同じと考えて良いだろう。3月から4月にかけて大学をはじめとする多くの教育機関がオンライン授業を選択せざるを得ない状況になり、したがって教員もどの授業形態を取るのかを真剣に考えざるを得なくなったが、選択肢としてはこの3つということになる。

自己学習型とは「動画を使わない授業形態です。学生は、資料教材を読み、授業課題を提出するというサイクルで進めます」（青山学院大学附置情報メディアセンター、2020 a, p.5）と定義されており、授業を動画あるいは音声でリアルタイムに配信するリアルタイム型、あらかじめ録画・録音していた動画やファイルを用いて講義を進めるオンデマンド型と大別されている。

リアルタイム型にせよオンデマンド型にせよ、ビデオや動画、音声を通して授業をすることになるが、個人的に念頭にあったのは放送大学の授業であっ

た。周知の通り放送大学はテレビやラジオを通じて教育をおこなっている遠隔授業のパイオニアであるから、なにかしら参考になるだろうと考えたわけである。ただすぐに気づくことになるのだが、45分のフォーマットで講義が録画・録音されているが、学習者の手元には講義内容を元にしたテキストがある。つまり録画・録音とテキストで1回分の授業を構成しているわけだが、自分の授業に当てはめた場合、こうしたことが可能かどうかを検討するとかなり難しいのではないかという判断にいたった。その理由は、突然の出来事で準備する時間が不足しているという理由を別にすれば、以下の通りである。第1に、通常の授業ではスライドを学生に見せながらそれについて解説をするスタイルでおこなっていたが、基本的に教科書は使用せず、複数の参考文献を利用しながらスライドを作成している。そのため放送大学的なスタイルでするには1回の講義で複数の文献を学生に読ませることになるが、それは過度な負担を与えることになる。

第2に学生にテキストを読ませなくても通常の授業をそのままリアルタイムにあるいは録画・録音して提示するやり方は、これまでの講義をそのままおこなえるので手間はなく、また授業内容の質という意味ではこれまでと同じではあるが、学生がPCなりタブレットなりスマホなりの画面を90分間見ることの教育効果には疑問符がつく。オンライン教育の手引きでもその事は指摘されており、動画を分割する、動画とレポートなどの作業を組み合わせることが推薦されていた（青山学院大学附置情報メディアセンター、2020b, p.13）。ただこうした細切れの動画とレポートの組み合わせは、これまでそういうやり方をしていなかった教員にとってみると、かなり授業研究をして実践しないと教える方も学ぶ側も中途半端になりはしないだろうかという疑問があった。

第3に、これは個人的なことではあるが、青山学院大学で非常勤をするのも、「現代社会と教育人間学 A」を担当するのも今年度からであり、対象となる学生がどういう学生なのか全くわからないなかで、録画・録音で授業するのは難しいのではないかということである。これまで教育学に関係する科目を教育学を専攻する学生あるいは教職課程に在籍する学生に教えてきたが、一般教養

としての教育学を教えることはこれまでなかった。授業とは相互行為であり、目の前の学生とのやりとりの中で構成されるものだとする、という素性なのかわからない上に遠隔でビデオを通したやりとりとなると、なんとか講義を成立させることができたとしてもその質が担保できないのではないかと考えたわけである。

このコロナ禍で突然降りかかったオンライン授業であるから、はじめから100%の質を担保するような授業ができないのはある意味当然であり、授業を提供すること自体が重要であることは言うまでもない。とはいえできるだけ学生が興味を持ち教育効果が得られるような教育方法を探るべきであるのも論を俟たない。自分の環境で動員できる資源や時間を考慮すると自己学習型が一番ふさわしいのではないかと考えるにいたったわけである。

2. どのように授業を進めたのか

2.1. 講義内容・各回のテーマ、シラバス

はじめに「現代社会と教育人間学 A」の概要について簡単に触れてみたい。この科目は青山スタンダード科目のなかのテーマ別科目として位置づけられている。テーマ別科目は「青学生が身につけるべき【教養】と【技能】の基礎を揃えた」（青山学院大学 web サイト）コア科目をさらに応用・発展させる科目であり、基本的に2年次以降の学生の履修が想定されている。テーマ別科目は9つの領域に分けられており、「現代社会と教育人間学 A」は社会理解関連科目に設定されている。

一般教養科目であり、またこの授業が設定されているキャンパス（相模原）では教育学を専攻する学生がいないということもあって、テーマ別科目ではあるが初学者向けに授業を構成した。講義概要は「現代社会では誰もが教育を受けているため、自らの経験を元に容易に教育へコミットすることが可能であるが、そうした個人的な感想を超えて教育に対する考え方を身につけることが本講義の目的である」、その達成目標を「この授業を履修した者は、1. 教育に関する初歩的な幅広い知識を獲得する、2. その知識を用いて、現在の教育現象

自己学習型によるオンライン授業の実践報告
—「現代社会と教育人間学 A」を事例として

を簡潔に説明する事ができるようになる」としている。

各回の構成についてはオンライン授業初日に提示した（表 1）。ただし、学生の反応などを見て後半部分は 2 回分テーマを変更し（矢印部分）、順序を入れ替えている。

表 1 「現代社会と教育人間学 A」授業計画

5 月 5 日	オリエンテーション
5 月 12 日	教育とは何かⅠ：教育の定義 自然環境と社会環境
5 月 19 日	教育とは何かⅡ：発達 学習
5 月 26 日	学校の成立Ⅰ：学校の起源と発展
6 月 2 日	学校の成立Ⅱ：近代学校と多様な学び
6 月 9 日	カリキュラムとはなにかⅠ：教育的知識とは カリキュラムの定義
6 月 16 日	カリキュラムとはなにかⅡ：学力低下論とゆとり教育
6 月 23 日	中間まとめ（小テスト）
6 月 30 日	学力テストと諸問題Ⅰ：学力と格差
7 月 7 日	学力テストと諸問題Ⅱ：学力テスト 国際学力調査→校則Ⅰ：校則とはなにか
7 月 14 日	いじめⅠ：いじめの定義と現状
7 月 21 日	いじめⅡ：諸外国におけるいじめとその対応→校則Ⅱ：制服の「あたりまえ」を問いなおす
7 月 28 日	少年非行と学校：少年非行と学校の関係史
8 月 4 日	まとめ
8 月 11 日	期末レポート提出

2.2. 自己学習型授業の実際

先述したようにこの講義では自己学習型を選択した。自己学習型の場合、実際の授業時間に関係なく実施することが可能であるが、本講義では同時性を重視したため、実際の授業時間内で基本的に完結する（事前・事後学習を除いて）形で実施した。

2.2.1. 授業の進め方

それでは具体的な進め方についてみてみよう。ちなみにこの講義は火曜日 2 限（11 時～12 時半）に設定されている。

①次回テキストの提示（授業の前週の土曜日）

今回のテキストについては事前学習が可能なように土曜日の午前中に提示した。当初の予定ではテキストの読解も含めて授業時間内、すなわち 90 分で完結させるつもりであったが、テキストの難易度や長さなどを勘案して、また青山学院大学が採用している LMS（Learning Management System）の CoursePower が前期開始当初にサーバーの処理能力を超えるアクセスが殺到したため度々ダウンし、学生がアクセス出来ないということが頻発したため、このような形を取るようになった。

②授業開始時間（火曜日 11 時）

授業開始時間には 2 つのファイルを学生が見られるように CoursePower で設定をした。一つは本日の授業の進め方について、もう一つは前回授業の講評である。前者については毎回ほぼ同じ形式で作成し、授業に関する連絡もこのファイルでもおこなっている。後者についてはいわゆるフィードバックをおこなった。前回授業で用いたテキストの解説を課題の設問に答える形でおこない、また学生から出された質問などにも答えるようにしていた。

③授業内課題の提示（11 時 10 分）

授業内課題はテキストの基礎的な読解・理解を把握することを目的として設問を作成した。テキスト自体は教育学の入門書から内容・難易度などを考慮して選んでおり、大学の 2 年生以上にとってはそれほど負担にならないと考えていた。設問は 3 問で字数制限などは設定せず、授業時間内に提出できる分量にした。なお締め切りまでに提出できない場合は減点すると学生に伝えている。

④リアクションペーパーの提出（12 時）

授業内課題はテキストの客観的な把握ができているかどうか、またそれに関してどのような意見があるかということに焦点を置いていたため、授業テーマに関する感想や疑問などについてはこちらのリアクションペーパーで聴くことにしていた。リアクションペーパーは通常、授業終了直前あるいは終了後に提出するものであり、当初はこの授業でも事後学習の一環としてそうしていた。しかしながら学生によって授業内課題の提出時間に違いがあり、早めに提出した学生がリアクションペーパーを提出するのをわすれることがあったりしたため、授業時間内でもリアクションペーパーを提出できるように変更をした。

⑤授業内課題提出締め切り（12 時 30 分）

締め切りを大きく遅れて提出する学生はほとんどいなかった。これは締め切りを守れなかったら減点するというものもあるだろうが、テキストや設問の内容、難易度がそれなりに適切だったこともあると思われる。授業が開始された5月初めあたりは、先述したようにサーバーの問題などがあり、締め切りに間に合わなかった学生も幾人かみられた。そうした場合はもちろん減点などはせず、その事は学生にも周知した。

⑥リアクションペーパーの締め切り（24 時）

リアクションペーパーは授業に関する感想や疑問、質問などを書いてもらうため、通常の授業でも重視していたが、オンラインでも同様に考えていた。ただ学生の立場からすると、授業内課題で書いていることとは別に書くことにすこし戸惑いを感じたりするのではないかと考えており、しばらく様子を見て機能しないようならリアクションペーパーをなくすのも一つかと考えていた。ただ提出し忘れる学生は一定数いたものの、課題とは別のものであると認識してくれたようで、質問や感想などを自由に書いて提出してくれた。また質問が来た場合や疑問に感じたことに対しては、個別に返答したり翌週の講評で答えるようにした。

以上が通常の授業の進め方である。授業内課題の提出はほぼ毎回 100%であり、リアクションペーパーは若干落ちるがそれでも 90%以上の提出率であった。ただしフィードバックである講評については未参照者が毎回 7, 8 人程度いた。

3. 自己学習型授業とオンライン授業の課題

3.1. 学生アンケート

通常の講義であれば授業終了後に学生と少し話したりする機会があったり、表情からこの授業はうまくいっているのか、今日はどうだったのかなどを感じられるが、オンラインでしかも自己学習型ということもあり、そうした学生の声は意識しないと聞くことができない。そのため CoursePower のアンケート機能を用いて簡単なアンケート調査を 14 回目の講義後におこなった。設問は 6 問設定し、匿名で希望者のみを対象としており、受講生 39 名のうち 25 名が回答している (表 2)。以下簡単にアンケート結果を紹介する。

表 2 アンケート設問

1. 前期のオンライン授業には大きく分けて①リアルタイム型、②オンデマンド型 (録画・録音を利用する)、③自己学習型 (動画を使わない授業形態)、の 3 種類があったと思います。あなたが前期で受けた講義をこの 3 種類に分けてください (例: ① 4 コマ、② 3 コマ、③ 5 コマ)。
2. ①リアルタイム型授業を受けた人で、どういう所がよかったのか、あるいは問題だったのかについて自由に書いてください。
3. ②オンデマンド型授業を受けた人で、どういう所がよかったのか、あるいは問題だったのかについて自由に書いてください。
4. ③自己学習型授業を受けた人で、どういう所がよかったのか、あるいは問題だったのかについて自由に書いてください。
5. 授業形態は別にしてオンライン授業に対してどのような感想をもっていますか。自由に書いてください。
6. この講義「現代社会と教育人間学 A」についてうかがいます。自己学習型でおこなわれましたが、授業の進め方 (テキストの難易度や分量・課題の難易度や分量・フィードバックなど) について自由に書いてください。

自己学習型によるオンライン授業の実践報告
—「現代社会と教育人間学 A」を事例として

設問 1 の結果は①が 90 コマ、②が 101 コマ、③が 93 コマということで、集計するとオンディマンド型が少し多いが突出しているわけでもなく、3 種類のオンライン授業が同じような割合でおこなわれていることになる。もちろん個々の学生の履修状況は異なっているが、個人的には自己学習型を選択する教員が多いのではないかと考えていたので少し意外ではあった。

設問 2 「①リアルタイム型授業」についてだが、利点としてあげられた意見の中で多くみられたのがチャットやビデオを通じて教員にリアルタイムに質問ができるという意見であった。またグループワークを実施している講義では他の学生とコミュニケーションがとれたことや意見が共有出来た点をあげている学生もいた。その他これまでの講義と変わらないため生活のリズムがくずれない、授業を受けているという感覚があるという意見もあった。反対に問題点としては技術的な面を指摘している声が多かった。例えば、接続が不安定で講義の一部を聞き逃してしまったり、自分が講義から強制退出させられたりなどである。また教員の PC の問題で教員がその配信から退出してしまうことがあったなどの指摘があった。

設問 3 「②オンディマンド型授業」についてだが、いつでも繰り返しみることができ、必要に応じて一時停止して学習することができる点を回答者のほとんどが利点としてあげていた。またネットの接続状態を気にせず受けられるという点も利点としてあげられている。他方問題点の指摘はそれほどなかったが、スライドなどが音声のみの授業は苦痛であった、一人で受講しているため間延びしてしまうなどの意見があった。

設問 4 「③自己学習型授業」については、利点として、時間に縛られない、いつでもできる、回線の問題がない、自分のペースでできるなどがあげられていた。問題点としては、文面だけだと理解がしにくいところがあった、補足となるような音声・動画がないので曖昧に理解しているところがあった、集中力が切れることがあった、緊張感があまりない、などがあげられていた。

設問 5 では授業形態にかかわらずオンライン授業全体の印象を聴いている。肯定的な意見としては、学校に行かないですむ、通学にかかる時間がなくなり

余裕ができるなど時間に関する点が指摘されているが、多くの学生はそれ以上にオンライン授業について厳しい見方をしている。課題が対面授業時に比べて多くこなすのが大変であるという指摘や一人で授業を受けていると孤独であり大学に行っている感じがしない、授業時間内で完結する対面授業のほうが気持ちの切り替えができストレスにならないといった意見がみられた。

設問6はこの講義「現代社会と教育人間学A」について聴いている。匿名とはいえ授業担当者が採っているアンケートのためある程度差し引いて考える必要があるが、自己学習型にもかかわらず授業時間内に完結する点については概ね好評だった。ただそうした点が他の自己学習型授業と異なっているため、時間内で課題を提出するのが大変であったという意見もあった。

3.2. 考察

半期15回にわたって自己学習型で講義を行ってきたが、その中で気づいたことやオンライン授業に関する課題について上記アンケートの結果も踏まえながら考察してみたい。

3.2.1. 自己学習型「現代社会と教育人間学A」の課題

オンラインでの授業をはじめる前に懸念していた、授業の質や教育効果をできるだけ落とさずに学生に講義を提供することができたかどうかについては、正直なところ主観的にも客観的にもよくわからない。主観的に、というのはこれまで同じ方法で授業を行ったこともなく、また対象となる学生も上述したようにはじめて教える属性であるため、自分の中で比較することができないということである。また第三者による学生の授業アンケートなどをみられるわけでもないため、客観的にも学生がどのようにこの講義を考えているかを知ることができないからである。

とはいえ毎回の授業内レポートやリアクションペーパー、期末のレポート、および自分で採ったアンケートなどからどの程度学生が理解をしていたのか、授業をどのように感じていたのかをわずかが垣間見ることはできなくはな

自己学習型によるオンライン授業の実践報告
—「現代社会と教育人間学 A」を事例として

い。講義は現代における教育問題を中心に構成していたが、レポートやリアクションペーパーから判断する限り、学生にとっては自明なことの背景や未知な現象に対してそれなりに興味関心を持ったようであった。思った以上に真摯にレポートに取り組んでいることがうかがえた。またアンケートからも新たな知見が得られた、偏りなく幅広く学べたという意見があり、差し引いて考えたとしてもこちらの意図は伝わっているので、緊急事態の中での講義としては最低限の質は保てたのではないかと考えている。

一方で授業時間内で完成させるスタイルであったため、どうしても分量的に複数のテキストを1回の授業で提示することができず、当該回のテーマを派生させたり、違った観点からの分析を学生に示すことがあまりできなかった点は反省すべき点である。翌週の講評でできるだけそうした内容を取り上げていたが、通常の講義に比べると弱くなっていたことは否めない。もちろん自己学習型の他の授業のように授業時間とは関係なく課題を出せば解決するのかもしれないが、学生からすると（他の授業もあり）過大な課題にさいなまれることになるため、安易にこちらの伝えたいことを伝えるために多くの課題を出すことが良いわけでもない。このことは通常の講義でも同じであるため、講義内容の取捨選択というのは授業形式にかかわらず生じるある意味普遍的な問題であり、学生の理解力や負担などを適切に把握する必要があると改めて感じている。

3.2.2. オンライン授業の課題とこれから

現時点（2020年10月）ではオンライン授業が各大学で行われて半年が経ち、一通りその良し悪し、向き不向きなどが出てきているところである。日本経済新聞の連載「コロナが変えるキャンパス 大学トップに聞く」¹では大学トップへのインタビューが載せられているが、このコロナ禍におけるオンライン授業をはじめとした大学教育のあり方について語られている。その中でオンライン授業のメリットとして大講義にむく、知識を教授するタイプでは有効、何度もみられるオンデマンド型の有効性、質問が出やすくなったなどがあげられ

ており、他方で理系では特にそうだが、実験や実技、実習が困難であることや、人と人が接しての学び、討論・議論をおこなって自己の考えを発展させていくなどについては対面授業がやはり必要であるという意見が出されていた。

これらは一教員としての実感とそう乖離したものではなく、メリット・デメリットを考慮しながらオンラインと対面を組み合わせることで授業を提供していくのがこれからの大学教育の新常態となるのは想像に難くない。重要なのはどのように組み合わせることが効果的で質の高い教育を提供することになるのかを、大学が自らの社会的使命に照らし合わせて思案することであろう。例えば大学に入って間もないため人間関係の構築も必要とする新入生向けなのか、それとも上級生向けなのか。基礎的な知識の伝達を主とする講義なのか、それともそうした知識を前提として討論・議論を中心とする講義・演習なのか。またそうした教育課程レベルの話だけでなく、授業を担当する教員のレベルでも、基礎的な授業でもオンラインをメインとしながらも要所要所で対面を導入することを選択することは可能だろうし、出張や研究のため不在になり休講していた授業でもオンラインなら実施することもできる。その延長で言えばオンラインなら居住地域に関係なく大学へとアクセスできるわけで、これまで萌芽的、周辺的であったオンラインでの教育が全面的に大学教育のあり方自体を再考させる地点にあるとっていいだろう。

コロナ禍に関係なく、上記のようなことは教育課程を編成する時あるいは授業を担当する時に考えるべきことであるが、実際に自分が担当している授業が大学や学部教育課程の中でどういう位置づけにあり、何を伝えるべきなのかについてどこまで考えているのだろうか。また考えて授業を始めても何年か経つうちにおざなりになってしまうことはないのだろうか。新型コロナという奇禍によって生じた状況は、ある意味大学教育に対して根本的な問い直しを迫っているといっても過言ではなく、それをいかに受け止めて教育を行っていくのが、これからの大学教育の課題であると思われる。

自己学習型によるオンライン授業の実践報告
—「現代社会と教育人間学 A」を事例として

おわりに

前期にいろいろ試行錯誤しながら実施されたオンライン授業だが、後期になって多くの大学が対面授業を再開し始めている。とはいえ実質的にはオンライン授業がメインの大学も多く、青山学院大学も基本的に遠隔で授業が行われている。多くの教員が前期の経験を後期に活かすことになると思われるが、一人ひとりの実践とその共有がよりよい教育につながっていくとすれば、この実践報告もその一助となれば幸いである。

注

- ¹ 日本経済新聞電子版「大学の今追う 『コロナが変えるキャンパス』 まとめ読み」(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO64230110V20C20A9I00000/> 2020年9月30日アクセス)に大学トップのインタビュー記事がまとめて掲載されている。インタビュー対象は山極寿一・京都大学総長、越智光夫・広島大学学長、田中愛治・早稲田大学総長、曄道佳明・上智大学学長、大沢敏・金沢工業大学学長、森迫清貴・京都工芸繊維大学学長、永田恭介・中教審大学分科会長(筑波大学学長)、三木千寿・京都市大学学長、池ノ上克・宮崎大学学長、井原徹・白梅学園理事長の10名である(肩書きは当時)。なお山極総長のインタビュー記事については9月28日朝刊にも掲載されている。

参考・引用文献

- 青山学院大学附置情報メディアセンター (2020a) 『オンライン授業の手引き 自己学習型』 (2020年4月11日版), <https://telecon.aim.aoyama.ac.jp/guidebooks> (2020年4月15日アクセス。学院関係者のみ閲覧可能)
- 青山学院大学附置情報メディアセンター (2020b) 『オンライン授業の手引き リアルタイム型』 (2020年4月11日版), <https://telecon.aim.aoyama.ac.jp/guidebooks> (2020年4月15日アクセス。学院関係者のみ閲覧可能)
- 専修大学情報科学研究所 (2020) 『大学のオンライン授業を展開するための簡易ガイド』 (最終更新日2020年5月1日: 第10版), <https://docs.google.com/document/d/18zL19wzID2Zhg1eRFEXexg13Vw8P3uS1bKx7f7wAYss/edit> (2020年5月5日アクセス)